

本書は、私の前著『戦う姫、働く少女』（堀之内出版、2017年）の続編の位置づけになります。前著では現代の新自由主義やポストフォーディズムが複合した状況をポストフェミニズム状況と名づけ、その中でポピュラーカルチャーを中心に女性がいかに表象されているかを論じました。

今回の本はその男性版です。つまり、ポストフェミニズム状況において男性性はどのような変化を加えられ、どのように表象されているのか、というのがこの本のテーマです。

当然に、近年のフェミニズムと男性性との関係は一筋縄ではいかず、問題ぶくみのものでもあります。つまり、ポピュラーなメディアでは（現実にはどうかは別として）女性のエンパワリングな表象が出現している中、「弱者男性」とも言われるような従属化した男性が、フェミニズム的なものに対してルサンチマンを抱き、反発するといった分断の構図がせり出して来ています。

本書では、そのような分断を超えていくために、現代の男性性の規範がいかに変化してきており、それがポピュラーカルチャーを中心とする作品の中でいかに表象されているのかを論じました。とりわけ重要なのは、フェミニズムの呼び声に回答して「有毒な男性性」を修正するようリベラルな男性性が、同時に新自由主義（=ポストフォーディズム=ポストフェミニズム）に柔軟に回答できる能力を持った、ある種の勝ち組男性であるという点です。それが、男性内部での分断を引きおこしているとするれば、リベラルな新しい男性性をひたすらに評価し肯定することは分断を悪化させこそすれ、それを解除することはできないでしょう。

行うべきなのは、男性性の規範そのものがそのように歴史的・社会的に変化してきていることを理解した上で、コミュニケーション能力や障害（アビリティとディスアビリティ）といった観点から男性性の概念そのものを解きほぐしていくことだと考え、本書では『怪獣8号』『ジョーカー』『BEASTARS』『ヒックとドラゴン』『恋愛小説家』『もののけ姫』『鬼滅の刃』『ブルーピリオド』などなど（以上、ごく一部です）の作品を分析しながら、支配的な男性性と従属的な男性性のダイナミクスの読解と男性性概念そのものの脱構築を目指しました。後半では母息子関係、イクメン、老齢といった観点で、男性のライフステージに沿った議論もしました。

男性性をめぐるさまざまな水準での著作が多く出ている昨今ですが、作品批評という観点からその議論に貢献できればと願っております。

## 著作紹介

河野真太郎

# 『新しい声を聞くぼくたち』

（講談社、2022年）

